

Peril Over the Airport  
1953  
by Helen Wells

目次

エアポート危機一髪

5

訳者あとがき  
254

## 主要登場人物

- ヴィクトリア (ヴィッキー)・バー……………(フェデラル航空)のステュワーデス
- ジニー・バー……………ヴィッキーの妹。高校生
- ルイス・バー……………ヴィッキーの父。州立大学の教授
- ベティ・バー……………ヴィッキーの母
- ディーン・フレッチャー……………ヴィッキーの同僚パイロット
- ウィリアム (ビル)・エイヴリー……………フェアヴェューで小さな飛行場を経営するパイロット
- ルース・ストリーター……………ビル・エイヴリーの姉
- フレディ・ストリーター……………ルースの五歳の息子
- ドワイト・ミュラー……………ラン農家を営む、ビル・エイヴリーの友人
- アンドリュー・コーリー……………シカゴから来た実業家
- スピン・ヴォイト……………飛行機の整備士
- ガイ・イングリッシュ……………ヴィッキーの友人
- イングリッシュ判事……………ガイ・イングリッシュの父親
- マルコム・マクドナルド……………民間航空管理局 (CAA) の調査官
- J・R・スミッソン……………(ランド&スカイ社)の代表

エアポ-ト危機一髪

全米女性パイロット協会会長、マッテイ・F・マクファデンへ  
多大なるご協力に感謝の意をこめて

## 第一章 ヴイツキーの新たな情熱

ヴィツキー・バーの心の中には、このところずっと気になっているものがあつた。初めのうちは、そのくりくりとした明るいブルーの瞳を閉じて、気のせいだと思ひ込もうとした。それでもうまくいかないとなると、今度は懸命に無視しようとした。ところが、いくら頑張ってみても、どうしてもそれを心から消すことができない。「それ」は、危険でお金のかかる、スリルのあることだつた。どう考えても、淡いグレーがあつたブロードの、小柄な若い女の子に似合いの望みとは思えない。

デイン・フレッチャーは、そんなヴィツキーの心の内を感じ取っていた。デインとヴィツキーは、気のいい機長トム・ジョーダンのもと、ヘフェラル航空の旅客機に数カ月一緒に乗務している仕事仲間だ。デインは副操縦士、ヴィツキーはスチュワードスを務めている。

「これまでの人生で、こんなになにかを熱望したことはないわ。でも、絶対にできるわけがない」と思はず漏らしたヴィツキーに、デインが、真剣さと思ひやりのこもつたグレーの目を向けた。

「できるさ。君なら、きつとやれる」デインは力強く言つた。

ぱりつとした制服に身を包み、テールを挟んでヴィツキーとデインと向かい合つているもう一人のスチュワードスは、ジーン・コックスといい、八歳のときに飛行機の操縦レッスンを受けたことがあつた。その隣に座る、デインと同じ明敏な飛行士らしい目つきをした長身の若いパイロットは、

ジム・ボルトンだ。五月晴れのこの日、四人は搭乗前に「キティホーク・ルーム」でランチを共にしていた。

「あなた、世界的な有名人になるかもしれないわよ」と、ジーンがおどけた調子で言った。

「逆に、世界に出ていくのを、すっかりやめちゃうかもしれないぜ」と、ジム・ボルトンが口を挟んだ。

ヴィッキーは、お飾りの置き物のように見られることには慣れっこだったが、けっして、それを甘んじて受け入れたりはしなかった。ジムのあきれ顔は、かえって彼女の気持ちを奮い立たせた。

「誤解しないで」ヴィッキーは、むきになってテーブルに身を乗り出した。「スチュワードスの仕事を辞めてちやほやされようとか、そういう気はさらさらないの。これからも新しい出会いを続けたいし、毎日動きまわって知らない町を見るのは楽しいわ。一カ所にとどまっていることなんて、私には無理！」

「いつだって、どこかでなかが起きてるんですもの」ジーンは、ベリーショートの髪にのせたスチュワードス用の帽子の位置を直した。「退屈しないわよね」

「だけどさ——」と、ジム・ボルトンが口を開こうとした。

ゆつたりとした口調で、ディーンがそれを遮った。「いい加減、からかうのはよせよ。もう一杯ミルクを飲んだらどうだ。しじゅう飛行機に乗っている人間なら、遅かれ早かれ、自分で操縦してみたいと思うようになるもんじやないか。そうだよな、ヴィク？」

ヴィッキーは、ほっとしたようにうなずいた。「操縦ってものに、どんどん情熱がわいてくるの。きつと、たいへんな試練でしょうけど——自分自身を試すチャンスでもあると思う」

「言っとくけど、操縦するには、君は小柄すぎるぜ」と、ジム・ボルトンが言った。「それに、航空会社のパイロットの仕事は、女性には開放されていないしね」

とたんに、ジーン・コックスが椅子から腰を浮かせた。「いつか、そうなるわよ！　いまに見てらっしゃい！」

ヴィッキーは、気圧されたように息をのんだ。「私は、ただ、趣味で操縦したいだけなんだけど——」

「それと、ヴィッキーが小さすぎるっていうのもないわ！　背中にクッションや電話帳を挟めば、ペダルに足が届くのよ。うちの家族が所有していたカブに乗ったとき、妹と私は実際にそうやって、うまくいったんだから」ジーンの興奮が、いくらか収まってきた。

「ああ、確かに、その手もある」相変わらず穏やかな口調で、デーンが言った。「ヴィクに覚悟さえあるならね。けっして、たやすいことじゃないからな」

ジム・ボルトンにはにんまりとして、ちよつとからかってみただけだと白状した。両親の世代が自動車という最新の機械にはまったように、いまや若者はあたりまえのように飛行機に乗る時代なのだから、女の子が操縦したって当然だと言う。実際、飛行機を操縦する若者は大勢いる。数千人はくだらないとなれば、もはや水上スキーや乗馬と同じレベルと言っている。女性だって、チャーター旅客機や貨物輸送機を操縦できるだろうし、テストパイロットにもなれるだろう。工場から客のもとへ新品の飛行機を届けたり、ディーラー相手に実演したり、政府機を空輸する仕事もできるはずだ。もちろん、趣味で操縦したってなにもおかしくない。

「女子に向いている趣味だよ」と、デーン。きつと、男ばかりの五人兄弟で姉も妹もないデーン

ンの、女の子に対する優しさからくる言葉なのだろうと、ヴィッキーは思った。「特に力は必要ない。敏感さと器用さがあればいいんだ。それと、細心の注意深さだろうね。その点では、ヴィクはうつつけどと思うな——」

ヴィッキーは、期待をこめてデインを見つめた。自分の気持ちを萎えさせるような、勇気をくじくひと言を言つてはくれないだろうか。

「——冷静さを保つて、すばやく正確な判断を下す。操縦には、それが欠かせないんだ」

彼の長所である冷静な思考力など、たいしたことではないかのように淡々とした口調だった。「やつぱり、夢物語だわ」と、ヴィッキーは思った。「レース編みでも習ったほうが、よほどいいんじゃないかしら」

レース編みですつて！ とたんに、彼女は思い直した。自分が本当に求めているのは、冒険なのだ。いまの魅力的な仕事が大好きなのは間違いないが、実を言うと、スチュワードスの仕事は、別のなにかへの踏み台であるような気がしていたのだった。それがなんなのかは、自分でもよくわからなかったけれど。

テーブル脇の大窓から、四人は飛行機の離着陸を眺めていた。デインは、細面の頬の筋肉を引き締めて、別のことを考えているようだったが、やがてヴィッキーのほうへ向き直った。

「なあ、ヴィク。本当に飛行訓練を受ける気なら、君の故郷でやったらどうかと思うんだ」

「フェアヴューで？ ここみたいな大きな都会の空港に慣れてしまったら、小さな飛行場は、なんだか妙な感じがするけど」ヴィッキーは、広大な飛行場を指し示した。何マイルにもわたって広がる土地には、いくつもの格納庫<sup>ハンガー</sup>が立ち並び、銀色の機体が巨大な鳥のように鈴なりに停まっている。「ア

メリカでいちばんすてきな町だとはいっても、フェアヴューには、ちつぽけな草地の飛行場しかないわよ」

「航空産業が、いかに急速に発展しつつあるかを忘れちゃいけないよ」と、デイーンが切り返した。「それに、フェアヴューには、ビル・エイヴリーがいる」

「そんな人、知らないわ」と、ヴィッキーは言った。「誰なの？」こここのところ、あまり故郷には帰れずにいたし、フェアヴューに戻ったときも、ほとんどの時間を〈キャッスル〉という名で呼ばれている自宅で、両親と妹のジニーと過ごしていた。だから、町の人々との付き合いからは遠ざかっていて、ビル・エイヴリーという人物とは面識がなかったのだ。

「ビル・エイヴリーだって？」ジーンのパートナーを務める副操縦士が興味を示した。「テキサスで練習艦隊にいたときに、その名前のやつに会ったぜ。エイヴリーっていうのは、そいつだけだった。あのあと、太平洋戦域での航空戦に派遣されたんじゃないやなかったかな。ああ、あいつなら、どんな飛行機だって操縦できるさ！ それじゃあ、いまは飛行教官をやってるのか？」

「そうなんだ」と、デイーンは言った。「自分で空港を経営している。ヴィクが操縦を教わるのに、彼ほどの適任者はいないだろう」

「うーん、そうだなあ」ジム・ボルトンの顔に、徐々に笑みが広がった。「ビルは、ちよつと変わったやつだからな。ヴィッキーにとっちゃ初めて出会うタイプで、面食らうかもしれないぜ」

「ビル・エイヴリーって人、いつ空港をオープンさせたの？」

「面食らうのは、お互いさまなんじゃないか？」デイーンは、副操縦士仲間に向かって答えた。すっかりその話題に気を取られていて、ヴィッキーの質問が耳に入っていないらしい。